16 日目　桑名 -> 四日市

16 日目は 11 月 3 日(水)、桑名駅前に駐車し 7 時にスタート、晴れ。　前回は雨天の下を名古屋の宮まで歩いたが、猛暑の名残で半袖でも暑いほど、本日の早朝の温度は 7 度、既に晩秋の雰囲気で枯葉が舞い、手袋をしていない手は寒く、ポケットに手を突っ込んで歩き始める。　秋は 1 ヵ月程で駆け抜けた模様。旅のお供の FM はスムースボサ、ボサノバの軽快なリズムは晩秋にはそぐわないがまぁいいか。

桑名宿　42 番目

7 里の渡し跡碑

宮の 7 里の渡しを出た舟が到着する桑名の渡し場も同じ名の 7 里の渡しで、まず桑名駅から 7 里の渡し跡に直行する。　7 里の渡しは長良川の河口にあり、渡しの遺跡としては碑があるのみ。　堤防から眺めると「堰」が見える。　ひょっとしてあれが鮎が遡上しないとか生態系を破壊するとかして有名になった長良川の河口堰か?

長良川河口堰

堤防には、桑名城の隅櫓の一つ蟠龍櫓(ばんりゅうやぐら)が復元されており、北側に位置する 7 里の渡し跡碑からはシルエットが見える、はっきり見ようとして南側に回ると櫓は朝日に輝いていて綺麗。

朝日と蟠龍櫓のシルエット

朝日に輝く蟠龍櫓

この櫓は見学可能だが、早朝でクローズ。
堤防の内側は旧桑名城の跡で今は九華公園、城壁や天守閣は無いが、掘割の綺麗な公園となっていて、最初の桑名藩主の本多忠勝の甲冑の大きな像がある。

本多忠勝像

幕末の最後の桑名藩主松平定敬は会津藩主の松平容保の弟、司馬遼太郎の「王城の護衛者」に書かれた松平容保は「勤皇」と「佐幕」を両立させようとして結局薩長の敵役となり、弟の松平定敬は兄の会津藩と同盟し、共に明治新政府の「官軍」の猛攻を受け、桑名城は破壊されたとのこと。

公園を後にして、桑名の町へ。　桑名宿は城下町、その名残で旧東海道は町中を折れ曲がっており「7 曲がり」があるが、現在はそれ程複雑ではない。　要所要所に「東海道」の道標があってわかり易く、古い寺は多いが、本陣や旅籠などの宿場施設の古い建物は少ない。

天武天皇社

天武天皇社

壬申の乱のおりに天武天皇と皇后がこの地に宿泊したとのことで、天武天皇・持統天皇・高市皇子を祭った神社、天武天皇社がある。　因みに持統天皇とは天智天皇の娘で天武天皇の皇后、天武天皇の亡き後に天皇となり、100 人 1 首の「春過ぎて夏来にけらし白妙の. 衣干すてふ天の香具山.」の作者、高市皇子は天武天皇の長男。最近、日本の歴史小説が好きになり、物部氏や曽我氏、藤原氏の争いは小説の題材としては多いが、その場は殆ど関西で桑名の地名は余り見かけたことがない。

山口誓子の句碑

桑名の中心地を通り過ぎ、暫く歩くと矢田町となる。昔の矢田立場で、立場とは宿場と宿場の中間にあって茶店等の旅人が休憩する場所、間の宿との違いが分からない。

この矢田町あたりは古い民家が多く、ガイドブックに、牛を繋いでおく「鉄環」をつけた民家があると書いてあったので探したが見つからず。諦めて先を急ぎ、町屋川に突き当たり、一旦国道 1 号線に出て町屋橋を渡り、再び旧東海道に戻って歩いて行くと、タバコ屋の店先に俳人山口誓子の句碑があった。　山口誓子は京都出身で、肋膜炎を患い、この地で静養したとのこと。　石碑に彫られた句は読めず後でインターネットで確認した。

山口誓子の句碑
露けさよ
祷りの指を
唇に触れ

東海道の「松並木」の榎、樹齢 300 年

樹齢 300 年の榎の「松並木」

東海道の松並木は松だけでなく雑木も植えられていたが、太平洋戦争中に松根油をとる為に松は刈られ、榎だけが「松並木」として残ったものとのこと。　ここにも悲惨な戦争の影響が及んでいる。

葵の紋の寺、浄泉坊

近鉄の伊勢朝日駅の横で踏み切りを渡り、大きな看板の東芝工場の前を通り過ぎ、暫く行くと寺の前に三つ葉葵の紋をつけた寺があり、寺名は浄泉坊。由来記によると徳川家にゆかりの深い桑名藩主の奥方の菩提寺で、参勤交代の時に大名は籠からおりて一礼したとのこと。

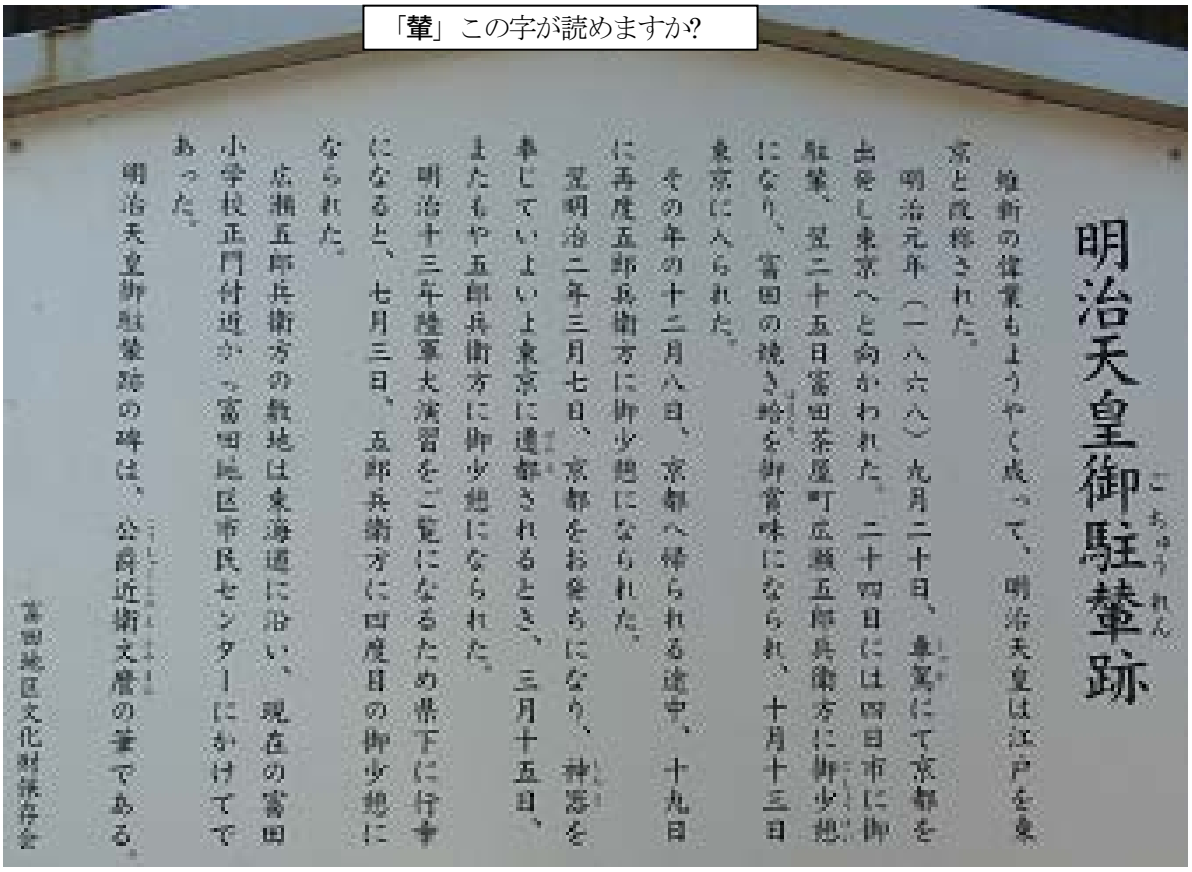
浄泉坊

浄泉坊の三つ葉葵紋と三巴門

間の宿、冨田

古い立派な寺や神社が沢山あるが、特色のないものはパスして歩いて行くと一里塚があり、間の宿、冨田に到着。　更に行くと立て札があり、当地に、明治時代、広瀬五郎兵衛宅があり、そこで明治天皇は休憩して焼きハマグリを食べ、その後計４回の桑名通過の際にも休憩した。　明治天皇がどうこうとの説明文にはあまり興味はないが、立て札の「輦」が初めて見る字で、読みは分かるとしても正確な意味が気になり調べた。　「１人の手で押し、または引く小形の車、或いは天子の車」、更に「皇居のある地、首都、輦下(れんか)」ともある、きっと戦前には良く使われる言葉だったのだろうな、又一つ勉強した。

「輦」この字が読めますか?



明治天皇御駐輦跡

維新の偉業もようやく成って、明治天皇は江戸を東京と改称された。

明治元年（一八六八）九月二十日、車駕にて京都を出発し東京へと向かわれた。二十四日には四日市に御駐輦、翌二十五日富田茶屋町広瀬五郎兵衛方に御少憩になり、富田の焼き蛤を御賞味になられ、十月十三日東京に入られた。

その年の十二月八日、京都へ帰られる途中、十九日に再度五郎兵衛方に御少憩になられた。

翌明治二年三月七日、京都をお発ちになり、神器を奉じていよいよ東京に遷都されるとき、三月十五日、またもや五郎兵衛方に御少憩になられた。

明治十三年陸軍大演習をご覧になるため県下に行幸になると、七月三日、五郎兵衛方に四度目の御少憩になられた。

広瀬五郎兵衛方の敷地は東海道に沿い、現在の富田小学校正門付近から富田地区市民センターにかけてであった。

明治天皇御駐輦跡の碑は、公爵近衛文麿の筆である。

富田地区文化財保存会

尼寺
質素な感じの寺があり、このあたりでは唯一の尼寺とのこと、尼寺だからというわけではないが、門の横の黒板に書かれている「良い　思いは　力がでる」
はシンプルで良かった。

尼寺　薬師寺

力石といかるが道
薬師寺の先はＴ字路となっており、そこに「力石」が置かれている。　大正の頃までこの地「茂福(もちふく)地区」の青年がこの力石を持上げて力を競ったとのこと、重量は 120Kg、手前の小さな石は子供用の力石で 19Kg。　子供用石でも持上げたらぎっくり腰になりそう。　Ｔ字路で左に曲がり、次を右に曲がると江戸時代の道標があり、左は四日市、右はいかるが、つまり奈良の斑鳩、江戸時代にはここから我家のある奈良への道が通じていた。　東海道ウォーキングとしては当然左を四日市へ。

茂福の力石

道標

大常夜燈と米洗川、海蔵川
行政的には既に四日市を歩いている。
大きな常夜燈があり、電線を引いて電灯がついており、常夜燈としてはまだ現役。　大常夜燈の先に川があり、橋に米洗川とある。　何かいわくのありそうな名前で、付近に説明でもないかと探したが何もなし。後でインターネットで調べると、まず読みは「よないがわ」、これはちょっと読めない。　いわくの方は、「壬申の乱のおり、当地に来た大海人皇子(天武天皇)が天照大神を遙拝する時に、御神酒を供えるためこの地の住民に麹づくりを教えたという伝説があります。この時に麹の米を洗ったことから米洗川と名付けられたそうです」とある。　又、壬申の乱がでてきた。

現役の大常夜燈

次の川は海蔵川で、掛かっている海蔵橋を渡る。
この海蔵川も珍しい名前なので調べたところ、よみは「かいぞうがわ」で平凡だが、「昔河口付近は海で、漁民が海草などを蓄える横穴を海蔵（アクラ）と呼んでいた。　500 年程前までは海蔵川（アクラガワ）と書いたが、のちに阿倉川（アクラガワ）の字を当てて左岸の地名とし、川の名は音読みして海蔵川（カイゾウガワ）となったと言われている」とあった。

三重川の橋のタイル絵
海蔵橋で、東海道ウォーキングスタイルの同年輩の男女 4 人のグループに追いつく。　聞けば昨年秋にお江戸日本橋を出発し、仲間の日程が合えば歩いてここまで来たとのこと。　暫く話をしたが、歩く速度が遅いので、またどこかで会いましょうと失礼して先へ急ぐ。　このあたりは既に四日市の中心地に近い。

牽牛のタイル絵

次の川は比較的大きい三重川で、橋に牽牛・織女・江戸時代の地図のタイル絵があった。
絵の図柄からすると、七夕の祭りで牽牛・織女の神輿を担ぐらしい。　又、堤防にも 53 次浮世絵の四日市のタイル絵、多分広重、があるが汚れていて何の絵か分かりにくかった。

織女のタイル絵

四日市宿　43 番目

四日市の笹井屋本店

道標「すぐ江戸道」

四日市の名物は「ながもち」、藤堂高虎が参勤交代の時に必ず老舗「笹井屋」に立ち寄って食べたという。
細長い餅で中に餡がはいっており「武運の長きは幸先よし」との縁起かつぎで人気があったとのこと。

土蔵の外観の、その笹井屋本店があったのでその「ながもち」をお土産として買う、750 円也。
帰って食べたが味はまぁまぁ。
笹井屋の先に道標があり、「すぐ江戸道」とある。　その道標で右折して国道を横断すると、旧東海道は四日市の中心のアーケードのある「スワマエ」商店街の中となる。

スワマエ商店街の
ろくろ首の人形

ろくろ首の人形が置いてあり、首を伸ばしたり引っ込めたりしているが、最も首が長くなった時を待って写真を撮る。

丹羽文雄生誕
の地の石碑

丹羽文雄
作家丹羽文雄生誕の地の碑があった、昔々「鮎」「日々の背信」「禁猟区」「美しき嘘」などを読んだ記憶ある。
インターネットで調べると四日市の寺の出身で僧侶でもあったらしい。
100 歳で平成 17 年 4 月 20 日歿、そうか平成の世まで生きていたんだ。
そういえば人生を生真面目に悩む小説は最近読んだことがない。
そんな小説は少ないのか、或いは私の好みが偏ってきているのか。

200 年続く薬局

200 年続く鈴木薬局

四日市の繁華街を抜け、古い、狭い旧東海道を歩いて行くと 200 年前から続いている「鈴木薬局」がある。　建物の一部は改造しているが、殆どは 200 年前建造当時のもの。中には薬を作る作業場があり、薬研なども保存されているとのこと。鈴木薬局だけでなく、四日市の旧東海道沿いには、旧家が多い。

四日市の東海道標識

旧東海道を示す現代の道標は土地々によって異なり、全く無いところもある。　桑名では、曲がり角を示す通常の「道路標識」が多かったが、四日市では、手書きの文字を書いた木の板で、旧家や商店に掛かっていて風情があった。　ただし、手作りと思っていたが、写真を後で比べると全く同じ文字で、木の板に印刷したものを配ったものらしい。

旧家にかけられている東海道標識

川の名前

四日市には川が多い、しかも変わった名前の川が。

鹿化川を渡り、後で調べたところ「かばけがわ」と読み、「近世頃から、この川に鹿が化けるという伝承があった」ので鹿化川になったとのこと。　その先に天白川がある。これは「てんぱくがわ」と読み、「天白橋付近に天白大明神が祀ってあったのがその由来」とのこと。　その天白橋なる橋を渡る際に、名古屋でも同じ名前の橋があったことを思い出し、その橋はそれまでの道路よりも高い位置にあって見晴らしがよかったことを覚えている。　この四日市の天白橋での眺めはと見ると、いかにも四日市らしい赤白だんだらの高い煙突が何本か見える。

天白橋からの眺め

マンホールの蓋

桑名のマンホールの蓋

桑名のマンホールの蓋

四日市のマンホールの蓋

桑名のマンホールの蓋は２種類見付けた、一つは七里の渡しで、もう一つはハマグリ君でこれは愛嬌があって面白い。　四日市のマンホールは３色の豪華なもので、何のデザインか分からなかったが、インターネットで調べると、四日市市の花となっているサルビアをデザインしたものとのこと。

近鉄内部(うつべ)線の電車
急用の電話を受けて午前中でウォーキングを切り上げ、近鉄内部線追分駅から電車に乗ったが、その電車の車両が小さいことに驚いた。

車両の長さは普通だが、幅が狭い。
普通の車両であれば２人掛けのシートが左右にあり、真ん中が通路となっているが、その車両は１人掛けのシートが左右にある。
バスの幅と同程度の車両。

16 日目は 3.5 万歩、約 20Km、宿場は二つのみ。

近鉄内部線追分駅から四日市経由で桑名に戻り、駐車場に置いてあった車で桜井の家へ午後３時に戻る、走行距離は往復 220Km。

内部線の電車

次回は　四日市 -> 石薬師 -> 庄野 -> 亀山 -> 関

16日目